試験問題（回収しません）

2019年8月1日 和漢医薬学　　学籍番号（　　）　氏名（　　）

1. 次の記述のカッコ内に適切な語句や数字を記入しなさい。

a.　西洋薬は、（ ① ）に対して薬を処方し、漢方薬は、（ ② ）に対して薬を処方する。

b.　漢方薬とは、（ ③ ）の生薬を（ ④ ）理論に基づいて配合したもので、（ ④ ）は古代中国を起源とし、（ ⑤ ）世紀頃に日本に伝来し、その後日本で独自に発展をとげた（ ⑥ ）である。

c.　東洋医学の特徴として、西洋医学と異なる大きな点は、（ ⑦ ）を重視することである。

d.　2011年の漢方薬処方の実態調査では、およそ医師の（ ⑧ ）%が漢方製剤を現在使用している。

e.　大建中湯は、開腹術後の合併症である（ ⑨ ）の治療や予防に外科的に使用される。

f.　六君子湯は、食欲亢進ホルモンである（ ⑩ ）の濃度を増加させ、抗がん剤による食欲不振に使われる。

2. 次の記述のカッコ内に適切な語句や数字を記入しなさい。

a.　日本薬局方に収載されている漢方エキスは（ ⑪ ）処方、医療用漢方エキス製剤（健康保険適用）は（ ⑫ ）処方、一般用医薬品用漢方製剤は（ ⑬ ）処方、薬価基準に収載されている生薬は（ ⑭ ）種類ある。

b.　医薬品製造指針（厚労省監修）の標準湯液：調剤済みの生薬を、生薬量の（ ⑮ ）倍量の水とともに土瓶に入れ、とろ火で（ ⑯ ）分煎じ、カスをこして、1日2～3回に分服するものである（煎液が、加えた水の約（ ⑰ ）量になるように、火力と煎じ時間を調整する）。

c.　漢方エキス製剤のメリットとして（ ⑱ ）や（ ⑲ ）、デメリットとして（ ⑳ ）や（ ㉑ ）がある。

d.　漢方医学における三大古典として、紀元前2世紀頃の（ ㉒ ）、2世紀頃の（ ㉓ ）、3世紀頃の（ ㉔ ）があり、（ ㉓ ）は薬物を（ ㉕ ）に分けて収載している。

e.　金元王朝時代（1115年～1367年）は、（ ㉖ ）が台頭し、（ ㉗ ）の理論づけという形で、（ ㉘ ）と（ ㉙ ）の融合が行われた。

f.　中華民国成立から現在まで、中華民国政府は（ ㉚ ）を廃止する方針を立てたが、中華人民共和国は（ ㉚ ）を保護して西洋医学と共存させる政策を立て、その結果、（ ㉛ ）が成立した。

g.　漢方医学の歴史として、吉益東洞は（　㉜　）を唱え、薬効や適応について解説した（　㉝　）及び傷寒雑病論から（　㉞　）を集めまとめた（　㉟　）を執筆した。

3. 漢方医学概論について、カッコ内に適切な語句を記入しなさい。

a.　日本漢方では、患者の（　㊱　）を「証」としてとらえ、処方を同時に決定する。これを（　㊲　）という。その際、診断によって証を決め、その診断は四診と呼ばれ、（　㊳　）診、（　㊴　）診、（　㊵　）診、（　㊶　）診がある。

b.　中医学では、患者の（　㊱　）を「証」としてとらえ、病気の原因を解釈し、それを治療する方法を決定し、それに見合う生薬、処方を決定する。これを（　㊷　）といい、個々の生薬に（　㊸　）が与えられており、基本となる処方に対して、比較的自由に生薬を加減する。

4. 漢方医学の治療方法について、カッコ内に適切な語句を記入しなさい。

a.　薬物療法では、基本的には（　㊹　）方向の薬物を用いる。すなわち、（　㊺　）（熱には清熱薬、裏寒には温裏薬など）、（　㊻　）（瘀血に対して活血薬、湿に対して利水薬など）、（　㊼　）（気虚に対して補気薬など）ことを目標に行う。

b.　五臓六腑概念（臓腑弁証）では、肝は（　㊽　）を意味し、精神安定、情緒の安定や、自律神経系を介して各種臓器の機能に関連し、心は（　㊾　）を意味し、高次の神経系の機能に関連している。

c.　気血水（津液）概念（気血津液弁証）では、体内の気・血・水（津液）の（　㊿　）が存在し、しかも（　51　）することが健康状態を保つ基本条件としている。つまり、三要素の中のバランス（陰陽）と流れが大切で、どれかが過剰あるいは不足したり、流れが滞ったりすると、病態を呈すると考える。

d.　病邪弁証（病因弁証）では、疾病の原因（病因）として、漢方医学では（　52　）と呼ばれる概念を使用する。陰陽のバランスが整っていて疾病に対する身体の抵抗力（「　53　」と呼ぶ）が十分であれば、生体側は（　52　）と戦うことが出来て（「　54　」という）、健康状態を保つことが出来るが、「　53　」が「　52　」と比べて相対的に弱くなったときに、「　52　」が生体を侵襲して身体に障害を与えると考える。

e.　八綱弁証とは、（　55　）、（　56　）、（　57　）、（　58　）の８種の概念である。その中でも、（　59　）は不足している状態、（　60　）は充実（過剰）な状態と指す。また、「正気が奪われた状態」を（　59　）、「邪が盛んな状態」を（　60　）としている。

f.　六病位弁証（六経弁証）における六病位とは、（　61　）を生体の闘病反応のパターンによって鑑別する分類法である。

5. 次の記述のカッコ内に適切な語句を記入しなさい。

a.　解表薬とは、（ ⑥② ）に侵襲してきた（ ⑥③ ）を発散させることにより、その部位における病証を除く作用をもつ薬物のことである。解表薬の多くは（ ⑥④ ）味を持ち、肌表に侵襲した（ ⑥③ ）を（ ⑥⑤ ）によって外散する。風邪、寒邪、熱邪の侵襲によって発症した、（ ⑥⑥ ）などの症状を治す一方、一部は肺気を宣散して止咳平喘に働き、あるいは祛風祛湿して（ ⑥⑦ ）を軽快させる。

b.　辛温解表薬として、宣肺平喘の薬能をもつ（ ⑥⑧ ）、温陽化気の薬能をもつ（ ⑥⑨ ）、温中止嘔の薬能をもつ（ ⑦⓪ ）がある。

c.　辛温解表剤として、桂枝湯は（ ⑦① ）のカゼの初期の急性熱性症状（悪寒、悪風、発熱、頭痛など）、葛根湯は（ ⑦② ）のカゼなどの初期の急性熱性症状や（ ⑦③ ）を伴うカゼや頭痛、肩こりなど、麻黄湯は（ ⑦④ ）のカゼなどの初期の急性熱性症状や関節痛、筋肉痛、腰痛を伴うカゼ、インフルエンザの初期に用いられる。

6. 次の記述のカッコ内に適切な語句を記入しなさい。

a.　和解少陽剤は、少陽病期において、（ ⑦⑤ ）まで侵襲してきた「邪」に対して、ここで（ ⑦⑥ ）することによって発現した（ ⑦⑦ ）、（ ⑦⑧ ）、悪心、食欲不振、口苦などの症候を呈するものに用いる。この部位に熱がこもり、外から発散させることが出来ないため、いつまでも微熱が続くような病態に適応する。ここに侵襲した「邪」を「和解」し、正気を回復させるためには、柴胡を（ ⑦⑨ ）とし、（ ⑧⓪ ）を臣薬として組み立てられた処方が用いられ、日本漢方では（ ⑧① ）とも呼ばれる。

b.　柴胡加竜骨牡蛎湯は、（ ⑧② ）があって驚きやすく、動悸や不眠、めまい、のぼせなどをともない、あるいはみぞおちがつかえて便秘し、尿量減少のあるものの高血圧症、ヒステリー、血の道症に適応する。

c.　抑肝散は、柴胡と釣藤鈎の両方が配合され、（ ⑧③ ）のトラブルにまんべんなく対応できる。

d.　イリノテカンの副作用として、遅発性下痢という副作用があるが、それを予防するために（ ⑧④ ）を併用するレジメンが用いられている。

7. 次の記述のカッコ内に適切な語句を記入しなさい。

a.　清熱薬は寒涼の性質を持ち、（ ⑧⑤ ）を清解する薬物で、熱病の高熱・熱性の下痢などのさまざまな（ ⑧⑤ ）の症候に用いられる。

b.　清熱剤は、外邪が化熱して（ ⑧⑥ ）に入り、感情の失調や気鬱化火、陰虚内熱などによって生じた（ ⑧⑦ ）や病的な火をとる処方である。「六病位」弁証の（ ⑧⑧ ）期に相当する病態に使用する。

c.　むやみに咽喉がかわいて水をほしがる、あるいは熱感のはげしいものの、糖尿病の初期、暑気あたり、熱性疾患時に適応される清熱剤は（ ⑧⑨ ）である。

d.　麻黄を使いたいけど、体温が高すぎる時や熱症状が強いときには、麻黄に（ ⑨⓪ ）を組み合わせた清熱剤を用いる。

e.　赤みが強く、膿が出ているようなニキビには清熱剤の（ ⑨① ）が有効とされている。

f.　瀉下薬は、（ ⑨② ）を排泄させることによって、腸胃の積滞や水飲などの有害な物質や（ ⑨③ ）を除くことにより、病態を改善する薬物である。また、瀉下剤は、西洋医学における便秘薬としての作用だけでなく、（ ⑨③ ）を糞便として取り除くことにも用い、「六病位」弁証の（ ⑨④ ）期に相当する病態で、便秘傾向を持つものなどにも使用される。

8. 次の記述のカッコ内に適切な語句を記入しなさい。

a.　温裏薬は、（ ⑨⑤ ）を改善する作用がある。脾胃の（ ⑨⑥ ）が虚衰して腹痛・嘔吐・下痢などを呈するもの、あるいは（ ⑨⑦ ）の侵入によってこのような症候をきたしたり、憎悪したものに対し、（ ⑨⑧ ）を温め、脾の運化や胃の通降を回復し、痛みを止める（これを［ ⑨⑨ ］という）。また、心腎の（ ⑨⑥ ）が衰弱し、寒がり・四肢の冷えなどを来したものに対して温腎扶陽したり、急に心腎の（ ⑨⑥ ）が虚衰したショック状態に対して回陽救逆する働きがある。

b.　温裏剤の（ 100 ）は、別名、玄武湯と呼ばれ、冷えから来る消化器症状や水のトラブルに適応する。

c.　小青竜湯を使いたいけれども、麻黄の副作用が気になる時の鼻水やアレルギー性鼻炎には、温裏剤の（ 101 ）を用い、小青竜湯と同様に、温裏薬の（ 102 ）と（ 103 ）が配合されている。

d.　過敏性腸症候群における消化管のけいれんを（ 104 ）と考え、桂枝加芍薬湯では、消化管のけいれんには生薬の（ 105 ）が働いている。